原著論文

ル・コルビュジェの建築作品における「窓」への感性和「東方への旅」

千代 章一郎

広島大学大学院

The Influence of the 'Voyage d'Orient' upon Le Corbusier's Kansei of 'Window' in the Architectural Works

Shoichiro SENDAI

Graduate School, Hiroshima University, Kagamiyama, Higashihiroshima-shi, Hiroshima 739-0036, Japan

Abstract : The purpose of this paper is to consider the Kansei (sensitivity) of 'window' through the journey of Le Corbusier (1887-1965) in 1911 and his architectural works from the viewpoint of Kansei-philosophy. At first, the author analyzed Le Corbusier's descriptions concerning Le Corbusier's journey (*Voyage d'Orient carnets* (1911) and *Le Voyage d'Orient* (1965)), and his work (*Le Corbusier & Pierre Jeanneret Oeuvres complètes, vols.8* (1910-1969)). Using the KJ method, the author extracted from his journey, 5 themes concerning 'window' ('material', 'color', 'form', 'light' and 'view'), and it was found that Le Corbusier modernized these 6 themes (the said themes and 'ventilation') in the stage of his architectural activity. Through the comparison of these themes, the author discussed the importance of natural landscape through the window as the reflection of Le Corbusier's architectural Kansei (sensitivity).

Keywords : Kansei of the Architect, Le Corbusier, Window

1. はじめに

1.1 目的

本研究は、単に五感による受動的感性だけではなく、場所と身体の質的な相互関係に着目する感性哲学の視点[1]から建築的感性の主題を抽出して解明することを大きな目標としている。それは言語化され、概念化されるものの底部ではたらくものを明らかにすることに他ならない。

そこで本稿では、環境のユーザーではなく、環境のデザイナーとして近代主義建築を代表する建築家の一人であるル・コルビュジェ (Le Corbusier, 1887-1965) の「窓」に着目し、建築家の青年期における旅の身体的体験が建築構想に与えた影響を分析することによって、ル・コルビュジェの「窓」に関する建築的テーマの変容を明らかにし、そこから言葉以前の建築的感性の一端を考察する。

本稿が対象とする旅は、ル・コルビュジェが建築習得を行う際、重要な教育的役割を担ったとされる「東方への旅 (Voyage d'Orient, 1911年5月～11月)」である。青年期の「東方への旅」における旅の記録は、ル・コルビュジェの建築的発想・創作の源泉として、ル・コルビュジェの著作に何度も再録されている[注1]。それは「窓」を構想する際においても例外ではない。筆者らはすでに「東方への旅」そのものだけを対象に旅における「窓」の建築的感性について考察している[2]。それに対して本稿では、建築制作期において、その感性がル・コルビュジェの建築構想へと変換される過程に焦点を当てる。

1.2 研究の方法

「東方への旅」に関する分析の一次資料として、旅の現場

で即時的に記録された『ル・コルビュジェの手帖 東方への旅 (Voyage d'Orient carnets)』(*Carnets*と表記)[3]と旅の後に旅行記として出版された『東方への旅 (Le voyage d'Orient)』(*Voyage*と表記)[4]の記述を用いる。一方、ル・コルビュジェの建築制作に関する一次資料として、ル・コルビュジェ自身による建築作品の説明及び建築理論が記載されている『ル・コルビュジェ全作品集 (Le Corbusier et Pierre Jeanneret Oeuvres complètes, vols.8)』(*Oeuvres*と表記)[5]の記述を用いる。

これらの資料から、筆者が取り組んできた「壁」「屋根」及び「庭園」における分析方法を踏襲して比較検討を行う[6-8]。すなわち、「窓」を説明対象とした記述を *Carnets*, *Voyage*, *Oeuvres* から抽出し、それぞれの記述内容を、KJ法を用いて整理することで、主題を抽出する[注2]。そして、抽出された主題から *Carnets*・*Voyage* と *Oeuvres* を比較分析することにより、ル・コルビュジェの感性を考察する。

なお、本稿で扱う窓はル・コルビュジェの「日差しの問題 problème de l'ensoleillement」という論文における窓の歴史的変遷に関する説明(図1)に依拠する。

図1 ル・コルビュジェによる窓の説明図

すなわち、ル・コルビュジエは「日差しの問題」を説明する際、左端の1から右端の9までの窓の歴史的変遷について図解して説明している(図1)。1から7の窓は、「壁に窓があげられる。窓はいろいろな理由から時代によって大きさが異なる」[注3]とし、現代における8, 9の窓は「その壁はガラスの膜でよく、<ガラス壁面>となる」[注4]としている。つまりル・コルビュジエは、壁面を穿いて設置される伝統的な窓(fenêtre)だけではなく、スラブとスラブの間を膜のように包む壁面(pan)そのものも「窓」になり得ることを説明し、「日差しの問題」に関わるあらゆる開口(ouverture)を「窓」の主題としている。そこで本稿では、建築物の開口全般を分析対象の「窓」とする。

1.3 研究の位置づけ

ル・コルビュジエの旅に着目した研究として、旅の体験が後の建築設計に与えた理念的影響や、旅において見出された歴史的建築物の建築設計への参照体系の分析がある[9-12]。また、旅の旅程や記録の論証的研究を通して、ル・コルビュジエの自己形成に関する分析を行っているものがある[13-16]。

上記の既往研究は、ル・コルビュジエの旅を通しての自己形成と建築理念形成の包括的な論証である。これらの既往研究に対して本稿では、建築家の身体的な旅の体験が建築的構想に変換される際の感性に着目し、その方法論として *Carnets · Voyage* と *Œuvres* の差異を明らかにする。

2. 主題の抽出

対象とした一次資料から「窓」に関する記述を抽出し、記述の内容をKJ法によってそれぞれに整理する。

なお、本研究では、建築歴史意匠の研究者3名によってKJ法を行い、要素的な類似性による記述の分類をおこなった。その際、それぞれによる判断が異なる場合には、判断根拠と判断の是非を議論し、判断の一致が得られた時点で再度始めからKJ法による分析を試み、全ての記述について判断が一致するまでこの行程を繰り返した。

すでに筆者らは、「東方への旅」におけるル・コルビュジエの「窓」に関する記述を、「素材」、「色彩」、「形態」、「光」、「景観」の計5つの主題に分類したが(図2)、同様の方法で分析を試みた結果、建築制作においては、「素材」、「色彩」、「形態」、「光」、「景観」に加えて「通風」の計6つの主題に分類することができ、その記述内容を要素的に組み分けた結果、建築制作前期(1920年代～1930年代前半)(図3)と建築制作後期(1930年代後半～1960年代)(図4)の2期に大別することができた。

3. 「東方への旅」における「窓」の主題(図5)(表1)

「東方への旅」における旅程と「窓」への言及場所を示すと図5の通りである。また、その呂的を主題別に示すと表1の通りである。

図2 KJ法による「東方への旅」における「窓」の図解

図3 KJ法による建築制作前期における「窓」の図解

図4 KJ法による建築制作後期における「窓」の図解

ル・コルビュジエの建築作品における「窓」への感性と「東方への旅」

表1 「東方への旅」における主題と記述の特徴

	素材	色彩	形態	光	景観
記述場所: ●					
記述場所の建築類型	民家・宗教建築	民家・宗教建築	民家・宗教建築	宗教建築	民家・宗教建築
記述内容	伝統建材 〈窓枠〉	塗装色・素材色 〈窓枠〉	「窓」 〈寸法・形状〉	象徴性 〈陰影との対比・光の凝縮〉	自然的景観・都市景観 〈近景 遠景〉

図5 「東方への旅」の旅順

3.1 「素材」

「素材」を説明対象とした記述は、主に民家や宗教建築で確認することができる。ル・コルビュジエは窓枠に使用される伝統建材に着目している。

3.2 「色彩」

「色彩」を説明対象とした記述は、主に民家や宗教建築で確認することができる。ル・コルビュジエは窓枠に塗られた塗装の色彩及び、素材そのものが持つ色彩に着目している。

3.3 「形態」

「形態」を説明対象とした記述は、主に民家や宗教建築で確認することができる。ル・コルビュジエは組積造の壁面に穿たれた土着的、様式的な「窓 (fenêtre)」に着目し、その寸法と形状を記述している。

3.4 「光」

「光」に関する記述は、主として宗教建築で確認することができる。ル・コルビュジエは内部空間に直接入り込む光によって生じる陰影や光の象徴性に着目している。

3.5 「景観」

「景観」に関する記述は主に民家や宗教建築で確認でき、全て内部からの景観である。その景観は自然的景観と都市景観の2種類に分類される。なお、両景観ともその対象場は近景から遠景まで及んでいる。

4. 建築制作期における「窓」の主題

4.1 「素材」

4.1.1 新建材

制作前期においてル・コルビュジエは、鉄やガラス等の新建材の使用による構造的有用性を強調している。

一方、制作後期の新建材に関する代表的記述としては、「ナント・ルゼの住居単位 Unités d'habitation de Nantes-Rézé, 1952」の「外壁は一種の箱形 (クラウストラ) 採光部を不規則に面白く配したコンクリートの壁でできている。嵌められた透明または半透明の色ガラスはその枠によって強調されて、微妙な造形的な組み合わせをつくっている」[注5]と記述されるように、コンクリートや半透明色ガラスなど制作前期には用いなかった様々な新建材が使用される。

4.1.2 伝統建材

伝統建材に関する記述は制作後期に確認され、その記述の多くは「マートの家 Maison aux Mathes, 1935」の「部屋の採光 (扉も含む) は、ガラス壁面でなされる (木製骨組みにガラスまたはスレート入り)」[注6]の記述のような土着的素材の採用に関する内容である。このように、ル・コルビュジエは木材や石材といった土着的素材を採用することで、地域性のある表現を窓の意匠に取り入れている。

4.2 「色彩」

「色彩」に関する記述は制作後期に確認することができる。これらは無彩色・有彩色に塗装された窓についての記述である。しかし、記述例は2例しか確認されず、いずれも簡素な非説明的記述である。

4.3 「形態」(図6)

「東方への旅」において、ル・コルビュジエは組積造の壁面

図6 窓の形態

に穿たれた「窓」について記述をしているが、建築制作期においては、具体的な開口部として、**Euvres**からその名称を抽出してKJ方を用いて整理すると「水平連続窓 (fenêtre en longueur)」、 「ガラス壁 (pan de verre)」、 「不規則ガラス壁 (pan de verre irrégulière)」、 「波動ガラス壁 (pan de verre ondulatoire)」、 「アエラトゥール (aérateur)」、 「窓」、 「ガラスブロック (briques de verre)」、 「クラウストラ (claustras)」、 「キャノン (canon)」について記述がある。

特に制作前期では「水平連続窓」、 「ガラス壁」に関して、制作後期では「ガラス壁」、 「不規則ガラス壁」、 「波動ガラス壁」、 「アエラトゥール」、 「窓」「クラウストラ」、 「キャノン」に関して記述される。

4.3.1 「水平連続窓 (fenêtre en longueur)」

「水平連続窓」は壁面を横長の長方形に穿つことで設けられる開口部であり、その記述は1920年代に顕著に確認することができる。

ル・コルビュジエが図7で示すように、近代以前の「窓」は主として組積造に設けられる窓のため構造的制約が多く、形状は縦長にならざるを得ず、暗がりが生じる。そこでル・コルビュジエは、柱とスラブによるドミノ (Dom-ino) の構法を考案し、構造に制約されない「水平連続窓」を提唱することで、その開口形状がもたらす光量の多さを強調している。

4.3.2 「ガラス壁 (pan de verre)」

「ガラス壁」は垂壁・腰壁のない全面透明ガラスによる開口部であり、ドミノの構造を最大限生かしたものであり、その記述は建築制作期を通して確認することができる。

制作前期の「ガラス壁」に関する代表的記述としては、「日射しの問題」の「1921年から1928年の初期のものには、

図7 左：柱とスラブの構造に設置される「水平連続窓」
右：近代以前の組積造に設置される縦長窓

このガラス壁面の勝利として、水平な窓、続いて2重の水平窓、それから窓台をいくつも重ねるという方法があった。そしてガラス壁面になっていった」[注7]がある。

一方、制作後期においても「ガラス壁」に関する記述は確認できるが、前期の「ガラス壁」と同様の内容である。

4.3.3 「不規則ガラス壁 (pan de verre irrégulière)」

「不規則ガラス壁」は透明ガラスと木材またはスレートを不規則に組み合わせることによって構成される開口部であり、ガラス壁が部分的に充填されている。

「不規則ガラス壁」に関する記述は制作後期に確認することができ、代表例として「ガラス壁を効果的に区切って、嵌殺しにしたり、半透明や透明に、…また木製の板を滑るように入れて、ガラス面を30、60、100%に絞ることもできるだろう。…各人の必要と好みによって無限に変化して展開することができる」[注8]があり、制作後期におけるル・コルビュジエの「窓」の意匠の多様化を示している。

4.3.4 「波動式ガラス壁 (pan de verre ondulatoire)」

「波動式ガラス壁」は全面のガラス壁にコンクリート製のマリオンが波に見えるように配されたものである。

「波動式ガラス壁」に関する記述は、1950年代前半から1960年代前半に確認することができ、記述としては「ケンブリッジの視覚芸術センター Visual Arts Center à Cambridge, 1961」[注9]等で確認できる。

4.3.5 「アエラトゥール (aérateur)」

「アエラトゥール」は通風機能しかもたない通風に特化したスリット型の盲戸である。この窓は単体で使用されるのではなく、嵌殺しのため換気機能を持たない「不規則ガラス壁」や「波動式ガラス」と併せて使用される。

「アエラトゥール」に関する記述は、1950年代前半から1960年代に確認することができる。代表的記述としては、「インドのチャンディガールの「総合庁舎 Le Secrétariat, 1952」の「換気、垂直に床から天井まで幅27から43cmを、全体を適宜に解放できるようにして、太陽の位置に応じて、空気の比重差を利用して、建物の面ごとに自然な豊かな換気がなされる」[注10]があり、ル・コルビュジエは長いスリット状開口部からもたらされる通風によって、厳しい気候条件に対応しようとしている。

4.3.6 「窓 (fenêtre)」

「窓」は「水平連続窓」とは対照的に、壁面を穿つことで設けられるごく一般的な開口部であり、その開口形状は主として正方形や円形である。

「窓」に関する記述は1950年代前半から1960年代に確認でき、記述例としては「カプ・マルタンの小屋 Un Cabanon à Cap Martin, 1952」の「70×70cmの2つの窓のひとつ」[注11]のように、ル・コルビュジエは「窓」の開口形状について記述している。

ル・コルビュジエの建築作品における「窓」への感性と「東方への旅」

4.3.7 「ガラスブロック (briques de verre)」

「ガラスブロック」は、ガラスブロックを積層することで構成される窓であり、ドミノの柱とスラブの大開口面をガラスで充填するという発想に基づいている。

「ガラスブロック」に関する記述は制作後期に確認することができ、代表例として、「パリ郊外の週末住宅 Une maison de week-end en banlieue de Paris, 1935」の「ガラス壁は<ネヴァダ>型ブロック、または透明ガラス、…このような住宅の計画は入念にされなければならない。構造の材料自体が建築を構成するからである」[注12]が挙げられる。

4.3.8 「クラウストラ (claustras)」

「クラウストラ」は、コンクリート製の壁に穿たれた嵌殺し窓の集合体である。

「クラウストラ」に関する記述は、1950年代に確認することができ、代表例としては、「ロンシャンの礼拝堂 La Chapelle de Ronchamp, 1950」の「壁に星座のようにあけた穴は内に向って広がり、光を分散させる。」[注13]が挙げられる。ル・コルビュジエは壁への穿たれ方や穿たれた窓から差し込む凝縮された光について記述している。

4.3.9 「キャノン (canon)」

「キャノン」は採光機能しかもたない採光に特化した筒型の開口部であり、その開口形状は幾何学形状である。

「キャノン」に関する記述は1950年代後半から1960年代に確認することができ、代表的記述としては、「ラ・トゥーレットの修道院 Le Couvent de La Tourette, 1953」の「礼拝堂から突き出している<光の砲>」[注14]「天井にある光源」[注15]という記述がある。

4.4 「光」

4.4.1 快適性

制作前期の光に関する代表的記述としては、壁面に設けられた「水平連続窓」、「ガラス壁」から差し込む光について記述した「日射しの問題」の「太陽光線が是非に必要だ。それは生きる欲びに直接つながるばかりでなく、その活動の効率にもつながるものだ。そこでいえることは、建築は明るい床をつくることだと、こうして快さと使いよさは充たされる。」[注16]がある。

このように制作前期における記述は、壁面の開口部から差し込む光による、生活環境の衛生的快適性の説明であり、心理的な満足度など、質的な快適性については記述されていない。

一方、制作後期の快適性に関する代表的記述としては、「ヴェニスの新病院 Le nouvel hôpital de Venise, 1964」の「光は横から入る天空光で、太陽の影響を規制して、明るさが一定となっている」[注17]がある。このように、制作後期になると、記述対象が壁面の開口部だけではなく天井面の開口部が加わり、直接光だけではなく間接光が加わる。しかし、生活環境に関する比較的定量的な快適性に関する記述であることには変わりがない。

4.4.2 象徴性

光の象徴性に関する記述は1940年代後半から1960年代に確認することができ、代表例としては「クラウストラ」から差し込む光について記述された「ロンシャンの礼拝堂」の「内部には、光と蔭と、影の中の光との交響曲を、粗い穀皮を<ガンニト>吹きつけで物質化し、全体を白い石灰で仕上げたもので実現した」[注18]がある。

このようにル・コルビュジエは光量を調整し、陰影と対比させることで、光に象徴性を持たせようとしている。

4.5 「景観」

4.5.1 自然的景観

自然的景観に関する記述内容は建築制作前期・後期を通して一貫している。主な記述としては、より一般的な自然的景観について示された「緑の工場 L'Usine-Verte, 1945」の「この種の工場を<緑の工場>と呼び、労働を自然条件の中で行えるようにしたものだ。敷地、太陽、景観など感性に訴える要素を勘定に入れた。…所々に、眺めのよい所を求めて垂直の開口部がある…作業場には適当な所に、草地、樹木、空の見える場がしつらえてある」[注19] (図8)が挙げられる。

このようにル・コルビュジエは、敷地が植物や水など自然が豊かな場所に面している場合、その景観が特殊なものであれ一般的なものであれ、近景から遠景まで包括的に取り入れている。

4.5.2 都市景観

ル・コルビュジエが対象とする都市景観はいずれもその場所に特徴的なものである。代表的記述としては「オルセー・パリ 文化センター Orsay-Palais Centre de Culture, 1961」の「<オルセー・パリ>は市が将来果たさなければならない宿願を明確にする根本的な事業である。このパリの景観の独特な場、セヌ河、チュイルリー公園、モンマルトルの丘、凱旋門の丘、パンテオンの丘、アンバリード廃兵院、ノートルダム寺院、これらは目と心への大宴会である」[注20] (図9)が挙げられ、都市固有の建造物・場所が包括的に記述される。

4.6 「通風」

「通風」に関する記述は建築制作後期に確認することができ、その記述例としては「美術学校と建築学校 L'Ecole des

図8 緑の工場から見る自然的景観

Beaux-Arts et l'Ecole d'Architecture, 1964」の「ル・コルビュジェによる2つの学校のための屋根のスケッチ. この屋根は…最適な通風を保証する.」[注21] (図10) が挙げられる. 「通風」に関する記述は生活環境の物理的な快適性の説明である.

図9 オルセー・パリ 文化センターから見る都市景観

図10 美術学校と建築学校に設けられた窓からの通風

5. ま と め

5.1 結果 (表2)

ル・コルビュジェが *Carnets・Voyage* に示した記述から, 「東方への旅」における「窓」に関する主題として, 「素材」, 「色彩」, 「形態」, 「光」, 「景観」の5種類が確認できた. 一方, *Œuvres* からル・コルビュジェの建築制作期における「窓」に関する主題として, 制作初期は「素材」, 「形態」, 「光」, 「景観」の4種類, 制作後期は, 「素材」, 「色彩」, 「形態」, 「光」, 「景観」, 「通風」の6種類が確認できた.

制作前期にル・コルビュジェが顕著に示しているのは, 柱とスラブによる構造に依拠する窓の形状, その形状がもたらす光の定量的な快適性, そして近代の新建材に関する記述である. それに対して「東方への旅」の主な記述は, 組積造に穿たれる「窓」の様相, その窓から差し込む象徴性を有する直接光, そして伝統建材についての記述である. つまり, 制作前期と「東方への旅」では記述内容が大きく異なり, 制作前期において, 「東方への旅」は主題的には反映されていないことが分かる.

一方, 制作後期にル・コルビュジェが顕著に示しているのは, 様々な窓の形式と新・伝統建材によって可能となる形態意匠の多様化, 直接光や間接光による象徴性の効果についての記述である. つまり, 制作後期に関する記述内容は前期と大きく異なり, 制作後期においては「東方への旅」との相關関係が認められる.

その一方で, 前期・後期とも共通して, 自然的景観についての記述が認められ, 「東方への旅」においても, 同様の

表2 「東方への旅」と建築制作期 (前期・後期) における記述の比較

主題		「東方への旅」	建築製作期	
			前期(1920年代～1930年代前半)	後期(1930年代後半～1960年代)
素材	新建材	-	鋼材〈窓枠〉 ガラス材〈開口面〉	鋼材・コンクリート〈窓枠〉 ガラス材〈開口面〉
	伝統建材	鋼材・木材〈窓枠〉	➡ -	⇨ 木材〈窓枠〉 木材・石材〈開口面〉
色彩	塗装色	有彩色・無彩色〈窓枠〉	➡ -	⇨ 有彩色・無彩色〈窓枠・開口面〉
	素材色	有彩色〈窓枠〉	➡ -	➡ -
形態	-	「窓」	➡ 「水平連続窓」 「ガラス壁」	⇨ 「ガラス壁」 「不規則ガラス壁」 「波動式ガラス壁」 「エアロウール」 「窓」 「ガラスブロック」 「クラウストラ」 「キャノン」
光	快適性	-	明るい床	太陽の影響を規制して、明るさが一定
	象徴性	半陰影の中に燦然と輝く	➡ -	⇨ 光と蔭と、影の中の光との交響曲
景観	自然的景観	山・河・海・樹木・岩〈一回的〉	⇨ 海・湖・森・樹木〈一回・一般的〉	⇨ 山・河・海・草地・樹木・岩〈一回・一般的〉
	都市景観	建造物〈一回的〉	➡ -	⇨ 建造物・都市〈一回的〉
通風	快適性	-	-	快適な換気

「旅」の凡例: ⇨

「旅」の否凡例: ➡

「旅」の凡例かつ否凡例: ⇨

ル・コルビュジェの建築作品における「窓」への感性と「東方への旅」

自然的景観に関する記述が認められる。つまり、ル・コルビュジェは内部から外部へ向けられる自然的景観という主題については唯一「東方への旅」から建築制作前期・後期まで一貫して着目していることが分かる。そして、その景観の対象場も一貫して周辺環境から遠方の環境にまで及んでいる。

5.2 考 察

「東方への旅」から建築制作前期・後期に至る「窓」の主題の変遷は、制作後期において「東方への旅」の影響が認められるようになるという点で、「壁」の事例[3]とほぼ類似する。しかし「壁」には、窓から見える自然的景観のような継続され続ける主題は認められない。このような継続的な眼差しは「屋上庭園」の事例[5]に関して認められ、対象場も自然的景観であるが、「屋上庭園」の自然的景観はあくまで近景である。つまり、ル・コルビュジェにとって「窓」とは「屋上庭園」同様、建築と自然に関係性を持たせる媒体であるが、その景観は「屋上庭園」よりも遥かに拡がりがある。

確かに、「窓」からの景観は単に無媒介の景観ではなく、窓という建築的装置によって枠取られた人為的な景観であり、そこにしかない一回的な景観に定型化をもたらし作用がある。ル・コルビュジェの建築制作において「東方への旅」における「窓」からの景観が反映されているとすれば、それは「窓」が異国を旅するという土地の感性的体験をある一定の型として視覚的に定着させる装置として機能していたということに他ならない。ル・コルビュジェの場合、その「窓」に定着されたものは、人工的な都市ではなく、限りなく拡がる「自然」であった。確かに都市景観は、その固有の歴史性において不可避に一回的である。

5.3 結 論

以上要するに、ル・コルビュジェにとって「窓」は、その形態の多様化の過程において、「東方への旅」の体験を不可避に反映している。ル・コルビュジェの建築作品における「窓」はこの意味で、様々な土地の感性的体験の記憶をある一定の型として定着させる装置と考えられる。とりわけ、建築とその敷地の遥か遠景に至る自然までを結びつける媒体としてはたっている。こうしてル・コルビュジェは、自然的景観に魅了され続けるのである。

図版出典

- 図1: Le Corbusier: *Œuvres complètes*, vol.4, Les Éditions d'Architecture, Zurich, 1946, p.103
 図2: 筆者作成
 図3: 筆者作成
 図4: 筆者作成
 図5: 筆者作成
 図6: 筆者作成
 図7: *op.cit.*, vol.1, p.129
 図8: *op.cit.*, vol.4, p.78

図9: *op.cit.*, vol.7, p.225

図10: *op.cit.*, vol.8, p.105

表1: 筆者作成

表2: 筆者作成

注

- [注1] 無論、「東方への旅」だけが建築家に影響を与えたわけではないが、この旅が特別の意味を持つことは建築家自身が言及している。cf., Le Corbusier: *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complètes*, vol.1, pp.17-11.
 [注2] 本稿のように、意図や目的が確定していない記述から意味内容を汲み取ることで、建築家の感性の分析を行うことを目的とした研究においては、意味内容の具体性を保持しつつ最終的にひとつの枠組みへと収斂させるKJ法を用いた[20]。概ね、分類項目は既往研究である「壁」の事例[6]、「屋根」の事例[7]、「屋上庭園」の事例[8]と重複するものであり、妥当であると判断した。
 [注3] *op.cit.*, vol.4, p.103 (吉阪隆正訳: vol.4, p.101)
 [注4] *op.cit.*, vol.4, p.103 (吉阪隆正訳: vol.4, p.101)
 [注5] *op.cit.*, vol.6, p.188 (吉阪隆正訳: vol.6, p.184)
 [注6] *op.cit.*, vol.3, p.139 (吉阪隆正訳: vol.3, p.121)
 [注7] *op.cit.*, vol.4, p.104 (吉阪隆正訳: vol.4, p.102)
 [注8] *op.cit.*, vol.4, p.108 (吉阪隆正訳: vol.4, p.106)
 [注9] *op.cit.*, vol.7, p.63 (吉阪隆正訳: vol.7, p.63)
 [注10] *op.cit.*, vol.7, p.100 (吉阪隆正訳: vol.7, p.100)
 [注11] *op.cit.*, vol.5, p.62 (吉阪隆正訳: vol.5, p.60)
 [注12] *op.cit.*, vol.3, p.125 (吉阪隆正訳: vol.3, p.107)
 [注13] *op.cit.*, vol.5, p.78 (吉阪隆正訳: vol.5, p.76)
 [注14] *op.cit.*, vol.7, p.50 (吉阪隆正訳: vol.7, p.50)
 [注15] *op.cit.*, vol.7, p.50 (吉阪隆正訳: vol.7, p.50)
 [注16] *op.cit.*, vol.4, p.103 (吉阪隆正訳: vol.4, p.101)
 [注17] *op.cit.*, vol.7, p.140 (吉阪隆正訳: vol.7, p.140)
 [注18] *op.cit.*, vol.5, p.72 (吉阪隆正訳: vol.5, p.70)
 [注19] *op.cit.*, vol.4, p.78 (吉阪隆正訳: vol.4, p.74-77)
 [注20] *op.cit.*, vol.7, p.220 (吉阪隆正訳: vol.7, p.220)
 [注21] *op.cit.*, vol.8, p.105 (吉阪隆正訳: vol.8, p.99)

参 考 文 献

- [1] 桑子敏雄: 感性の哲学, 日本放送出版会, 2001.
 [2] 千代章一郎, 平尾慶太: ル・コルビュジェの東方への旅における「窓」への感性－旅の手帖と旅行記における記述の比較－, 第14回日本感性工学会大会予稿集2012, pp.F1-04, 2012.
 [3] Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d'Orient carnets*, Electa architecture, Fondation L.C., 1987, (Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret), 中村貴志・松政貞治 訳: ル・コルビュジェの手帖 東方への旅, 同朋舎出版, 1989).

- [4] Le Corbusier: *Le voyage d'Orient*, Les Editions Forces Vives, Paris, 1966, (Le Corbusier, 石井勉 訳: 東方への旅, 鹿島出版会, 1979).
- [5] Le Corbusier, Willy Boesiger ed.: *Le Corbusier et Pierre Jeanneret Œuvres complètes, vols.8*, Zurich, Les Editions d'Architecture Artemis Zurich, 1937-1970.
- [6] Shoichiro Sendai and Ryo Hagino: Le Corbusier's Kansei of 'Wall' –The Journey and the Architectural Concept by the Modern Architect–, The Proceedings of the Kansei Engineering and Emotion Research International Conference, pp.341-352, 2010.
- [7] 千代章一郎, 塚野路哉: ル・コルビュジエの「屋根」への感性 –近代建築家の旅と建築構想–, 日本感性工学会論文誌, 第10巻, 2号, pp.177-183, 2011.
- [8] 千代章一郎, 塚野路哉: ル・コルビュジエの「屋上庭園」への感性 –近代建築家の旅が建築構想へ与えた影響–, 日本感性工学会大会, E52, 2011.
- [9] Stanislaus von Moos: *Le Corbusier-Elemente einer Synthese*, Switzerland, 1968, (Stanislaus von Moos, 住野天平 訳: ル・コルビュジエの生涯 建築とその神話, 彰国社, 1981).
- [10] William J. R. Curtis, 中村研一訳: ル・コルビュジエー理念と形態, 鹿島出版会, 1992.
- [11] 松政貞治: 『ル・コルビュジエの手帖—東方への旅』を読むとく, ル・コルビュジエ 建築・家具・人間・旅 の全記録, エクスナレッジ, pp.128-139, 2002.
- [12] Stanislaus von Moos, Paul Glassman ed.: *Le Corbusier before Le Corbusier*, Yale University Press, New York, 2002.
- [13] Philippe Duboy: *Voyager avec Le Corbusier croquis de voyages et études*, La Quinzaine Littéraire, 2009.
- [14] Gresleri Giuliano: *Le Corbusier, Viaggio in Oriente*, Venezia, 1984 および 1985.
- [15] Geoffrey H. Baker: *Le Corbusier, The Creative Search*, E&FN SPON, New York, 1996.
- [16] Jacques Lucan éd.: *Le Corbusier une encyclopédie*, CCI, Paris, 1987, (Jacques Lucan ed., 加藤邦男 監訳: ル・コルビュジエ辞典, 中央公論美術出版, 2007).
- [17] Bruno Reichlin: La petite maison à Corseaux, une analyse structurale, in Armand Brulhart et al., *Le Corbusier à Geneve 1922-1932*, Editions Payot Lausanne, Zurich, pp.119-134, 1987.
- [18] ビアトリス・コロミーナ, 松畑強 訳: マスメディアとしての近代建築 –アドルフ・ロースとル・コルビュジエ–, 鹿島出版会, 1996.
- [19] フローラ・サミュエル, 加藤道夫 監訳: デテールから探るル・コルビュジエの建築思想, 丸善株式会社, 2009.
- [20] 川喜田二郎: 発想法, 中公新書, 1967.

千代 章一郎 (正会員)

1998年 京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了。京都大学大学院工学研究科生活空間学専攻助手を経て、現在広島大学大学院工学研究院社会環境空間部門准教授。建築歴史・意匠学の視点から、こども環境、建築景観、都市空間を通して感性哲学研究に従事。